

Care & Communication

ケア&コミュニケーション



DENTAL REPORT

東日本大震災後の時間を
地域と歩み
住民の暮らしに
寄り添う歯科医院
内館歯科医院 院長
内館 伯夫 先生

P01-06



INSIDE REPORT

スタッフの自主性を大切に
地域貢献にも取り組む
予防中心の歯科医院
医療法人 豊貴会
ざま駅前歯科医院 院長
西村 一郎 先生

P07-12



DOCTOR'S TALK

継承した歯科医院を
新規開業でリスタート、
デンタルIQを向上させる
治療に取り組む
Youすまいる歯科 院長
小林 祐二 先生

P13-16



THE FRONT LINE

米国留学を機に
歯内療法専門医院を
オープン

歯内療法の症例紹介

石井歯科医院 院長
石井 宏 先生

P17-22



建物全体とマッチする堂々とした看板を掲げた玄関



小上がり畳もある広々とした待合室

東日本大震災後の時間を 地域と歩み 住民の暮らしに 寄り添う歯科医院

岩手県沿岸部の山田町にある「内舘歯科医院」は、東日本大震災を経て、1年半あまり前に歯科医院を移転新築した。その歩みとこれからについて伺ってみた。



内舘歯科医院 院長 内舘 伯夫 先生

真っ白な和風の外観を持つ 歯科医院を震災9年後に再建

「内舘歯科医院」は、岩手県の三陸沖に面した山田町の新しく造成された高台にある。2011年3月11日に発生した東日本大震災のあと、山を崩して作られた住宅地の一角だ。

神社や姫路城を彷彿とさせるような、ゆるやかにカーブした屋根の真っ白な平屋建ては、遠くからもよく目立つ。入り口に建つのは6本の大柱。建物のなかにも2本の大柱があり、それらの柱は、山田町を守る山田八幡宮の「八」の字にちなんで建てられた。

和風の建物にした理由を内舘伯夫院長はこう話す。「和風の造りにこだわったのは、私が日本史を学ぶのが好きなことと、神社めぐりが趣味なことからです。壁や屋根を真っ白にしたのは、やはり歯のイメージから。健康的な白い歯を印象づけたいと思いました」

院内も和風の造りだ。待合室に子どもが遊んだり、お年寄りが腰かけられる小上がり畳のスペースがあったり、扉が障子や襖風になっていたり、通路の仕切りには大きなのれんが掛かっていたりしている。さらに珍しいのが診療室の壁面にまつられた立派な神棚だ。「山田町は神社とのつながりが深い地域です。私も長年、山田八幡宮のお祭りで神輿の担ぎ手を務めていま

すし、今年1月からは関口神社の総代を拝命しました。歯科医院の建物が和風というのは珍しいですが、海が近く、緑も豊かな山田町の景観に溶け込んでいますし、いいアイデアだったと思っています」

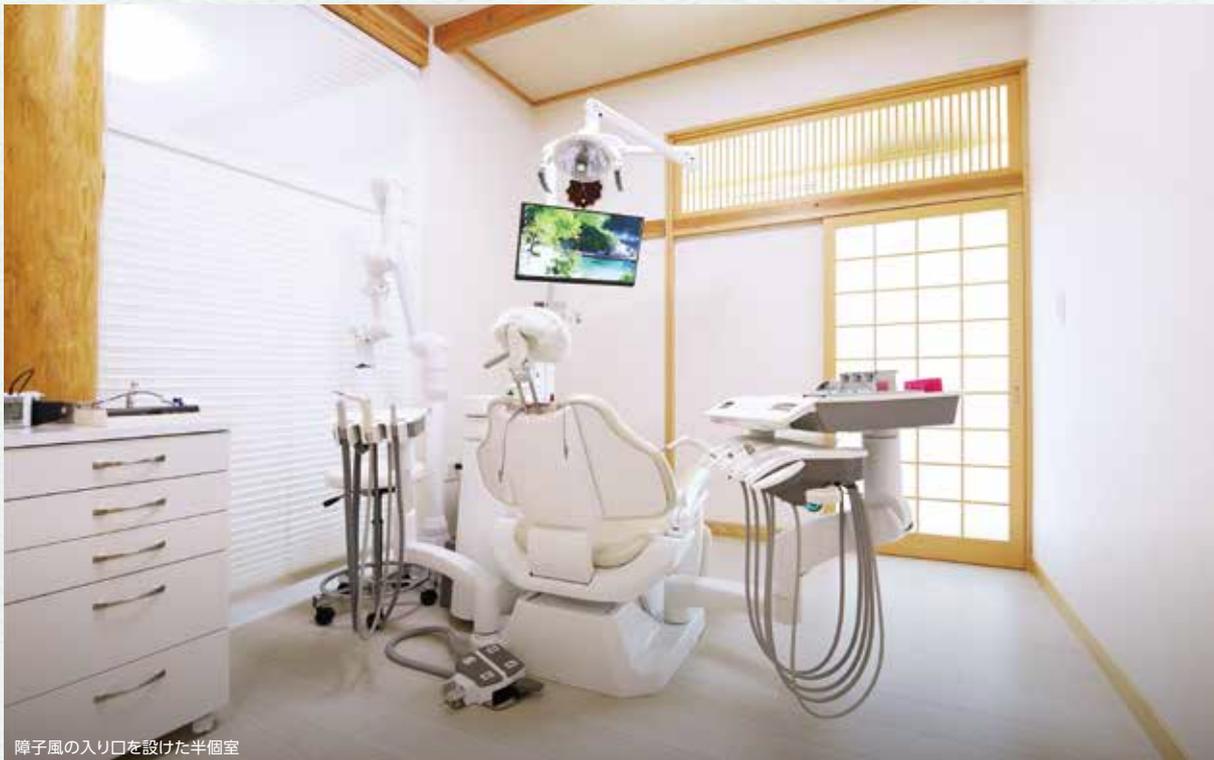
「内舘歯科医院」の敷地内の庭には、しだれ桜やつつじ、さつき、梅、桃の木があり、季節で変わる植物の色合いが白い建物によく映える。そんな建物や内装を見ていると、「穏やかな暮らしが守られ、これからも長く続くように」と祈る内舘院長の気持ちが伝わってくるようだ。

焦らずに診療を続けながら 歯科医院の再建を待つ

「内舘歯科医院」が開業したのは、2008年。町の中心部を通る国道沿いに自宅兼診療所としてスタートした。

しかし、東日本大震災で被災。山田湾に押し寄せた10.9mもの大津波に襲われ、建物が全壊流出した。山田町では、津波とその後起きた火災により、亡くなったたり、行方不明になったのは796名。3369棟の建物が倒壊している。

この日、内舘院長は午後から介護老人保健施設へ訪問診療に出かけていた。地震が起きたのは、歯科医院に戻り、休憩を取っていたとき。患者はいなかったが、



障子風の入り口を設けた半個室



待合室から患者用通路の境に掛けられたのれん



患者は専用の通路から各診療室に入る

地震の揺れで院内には多数の物が散乱した。「その頃、地震と小さな津波が何度か続いていましたが、さすがに経験したことのない揺れでした。聞いたことのないサイレンが町内放送で流れたこともよく覚えています。まずは自宅が遠いスタッフを帰しました。その後、道路が混んできたこともあり、残りのスタッフを高台にあった私の実家に避難させ、少し遅れて私も移動しました」

そして、高台から海の方を眺めていたときだった。町を大津波が襲った。内館院長は大切にしていた歯科医院と自宅が濁流に飲み込まれていくのを見ていることしかできなかった。「津波のあとに起きた火災もどンドン山のほうに迫ってきました。このあたりはプロパンガスを使っているので、

家に火がつくとボンと爆発するんです。家族を海からさらに遠い高校に避難させ、私は実家を守るために残ったのですが、一晩中、車のなかから町が燃えるのを見ながら過ごしました」

内館院長は避難所となった高校で、地域住民の医療ケアにあたった。「1年は歯科医院を再開できないだろう」と考えていた。しかし、震災から3カ月後、実家前の駐車場の敷地を借り、プレハブの仮設診療所で「内館歯科医院」を再開させた。「津波の被害で町の多くの機能が失われてしまい、保険医療機関の再開が急務でした。チェアや医療用品もすぐに用意できると言ってくれたディーラーさんの後押しもあり、『じゃあ、やりましょう』ということになりました」



チェアの後ろ側に診療側の専用通路を設け、スタッフ動線を確保



チェアの周囲は広いスペースを確保し、奥には神棚がある



診療室の壁にまつられている神棚

2台のユニットから始まった仮設診療所には、数多くの患者が訪れた。むし歯や歯周病の治療だけでなく、津波で入れ歯をなくした高齢の患者も多かった。

1、2年経った頃、仮設診療所にプレハブを追加して、ユニットを1台増やした。待合室がないため、患者に車のなかで待ってもらうこともあった。「町や歯科医院が被災したことはショックでしたが、感情的になると、仕事やプライベートが立ちゆかなくなると直感していました。あえて冷静さを保ち、日々を淡々と過ごすようにしていました」

新たな歯科医院の場所は、震災から2年ほど経った頃に決まったが、道路を通し、山を崩しての造成が必要だったため、着工までには、それから5年ほどの月日

がかかった。その間も内館院長は焦らず、地域の復興の足並みと時間の流れに身を委ねるように日々を過ごした。山田町では震災後、5軒あった歯科医院のうち、「内館歯科医院」を含め、3軒が再開している。「震災への思いや考えは人によって違うと思いますが、私の場合は、考えないことで乗り切っている気がします。真正面から向き合うとつらくなりますし、震災の日に時間が戻ってしまう。『震災を忘れない』とか『経験を活かす』と言えるのは、当事者じゃないと思うんです。私たちは身に染みてわかっているから口に出さないし、黙って行動をする。私たちの周囲にいる人たちが、震災を忘れずにいてくれたり、災害を繰り返さないために行動してくれることが、励ましになり、支えになるのではないかと考えています」



診療側の通路に安心感を与える2本の大柱がある



3Dパノラマレントゲンを備えたレントゲン室

子どもの歯磨き環境の回復にも力を入れる

現在の「内館歯科医院」はユニットが4台。1日30名ほどの患者が治療を受けている。高齢者が多い地域のため、むし歯の治療や義歯の作製と修理・調整が多い。

じつは震災後、被災地で問題になったのが、子どものむし歯が増えたことだった。避難生活が続き、食生活や生活時間が乱れたことが、歯磨きの習慣に悪影響を及ぼしていた。「岩手県のなかでも山田町は、以前から子どもたちのむし歯率が高い地域だったのですが、震災後、ワースト1、2を争うくらいになってしまいました。そこで、これ以上の悪化を防がなければということで始まったのが、フッ化物洗口です」

2013年に岩手県が県民の口腔衛生を向上させるため、「岩手県口腔の健康づくり推進条例」を制定したことも、内館院長たちの活動を後押しした。「とくにむし歯の多い地域の幼稚園と保育園、保育所、児童館に通う子どもたちを対象に、それらの施設と地区歯科医師会が協力し、週1回、フッ化物洗口を行っています。新型コロナウイルス感染症が流行する前までは、歯磨きボランティアも行っていました。歯科医師と歯科衛生士が週1回、歯磨きボランティアとして出向き、ブラッシングをしたり、フロスをかけてきれいにするという取り組みです。歯磨きボランティアは、歯科医師や歯科衛生士と接する機会ができることで、子どもたちの歯科医院への恐怖心をやわらげることもできますし、とてもいい取り組みなので、コロナ禍が落ち着いたら、再開したいと考えています」

子育て中でも働きやすく地域を支える歯科医院に

2020年に新たなスタートを切った「内館歯科医院」は、スタッフの働きやすさを考え、岩手県が設けている「いわて子育てにやさしい企業等」の認証を取得した。これは、雇用する労働者数が100人以下の中小企業を対象にした認証制度だ。仕事と子育ての両立支援を行い、男女が共に働きやすい職場環境づくりに取り組む企業等が認証を受けられる。

県内で認証を受けているのは、一般企業が多く、「内館歯科医院」のような医療機関は珍しい。

現在、「内館歯科医院」のスタッフは、歯科衛生士が1名、歯科助手が2名、歯科助手の資格取得を目指す2名の計5名。歯科助手の1人は育休を経て、9月半ばに復職した。「内館歯科医院」は、子どもの看護休暇を1時間単位で取得できることを新たな取組内容に加え、「いわて子育てにやさしい企業等」の認証を受けた。

「私の歯科医院で働くスタッフたちは、年代的に子育ての真っ最中です。産休・育休制度の整備はもちろんですが、子どもの急な体調不良や通院、保育施設からの呼び出しと、何かしら家庭の用事で仕事を抜けざるを得ないことが出てきます。でも、スタッフからすると、診療時間内の外出や急な休暇取得は言いづらいものです。そうした遠慮をせずに、言いやすい雰囲気を作りたいと思い、認証を取得しました」

医院の業務規則だけでなく、岩手県による公的制度を利用し、明文化することで、スタッフたちはより申請しやすくなる。また、認証を取得していることを院内に貼り出すこ

■ 開業から仮設診療所を経ての道のり

2008年、「内館歯科医院」は、山田町の中心地に自宅兼の診療所としてオープン。訪問診療も手がけ、頼れる歯科医院として住民に親しまれていた。

しかし、東日本大震災で被災。土台を残して一切を津波に奪われてしまった。それから3カ月後にプレハブの仮設診療所で診療を再開。その後、もう1棟を増設した。

そして2020年、現在地に移転新築。真っ白な和風の建物で新たなスタートを切った。



2008年に開業時の「内館歯科医院」



被災したあとの歯科医院



診療を再開した仮設診療所

とで、周囲からの歯科医院への信頼感も高まる。

「認証取得後はスタッフが今まで以上に明るく、一生懸命、仕事に取り組んでくれるようになりました。患者さんへの対応や院内の清掃、スタッフ同士や私とのコミュニケーションも向上したと感じています。私よりもスタッフが患者さんや地域の人たちにほめられる歯科医院であって欲しいと思っています」

内館院長は歯科医師を志したときから、山田町での開業を決めていた。歯学部卒業後、義歯専門の第一補綴科の先生に師事したのも、高齢者が多い山田町の地域性を考えてのことだ。勤務医の頃に山田町を離れた時期もあったが、故郷への思いは強い。震災前から訪問診療を続けることや中学校のバスケットボール部で18年間、コーチを務めたことから、地域とのつながりの強さが伝わってくる。

日々、診療にあたりながら、内館院長は「こんなことで患者さんに喜んでもらえるのか」と驚くこともあるそうだ。歯科医師からすれば当たり前前の施術でも、患者からすれば、「痛くなかった」「噛めるようになった」という素朴な喜びが生活の向上につながる。その様子を目にすると、「歯科医師になってよかった」とあらためて感じるという。

「これからも自分から積極的に働きかけてリードしていくというよりも、ニーズにしっかりと応え、支えることで、地域の口腔衛生が向上していけばいいと考えています。3Dパノラマレントゲンの設置も、将来的に矯正の需要に応える必要があるだろうと見越しての導入でした。歯で困っている方がまだまだたくさんいらっしゃるのでも、自分の知識と技術を提供し、患者さんに喜んでもらえる誠実な治療を続けていきたいと思っています」



内館伯夫院長（前列中央）と、スタッフのみなさん

PROFILE

内館 伯夫 先生

- 2004年 岩手医科大学歯学部卒業。宮城県と岩手県の歯科医院に勤務
- 2008年11月 内館歯科医院開業
- 2011年3月 東日本大震災の津波で被災。6月、仮設診療所で診療を開始
- 2020年3月 現在地に移転新築開業

内館歯科医院

住所：〒028-1352 岩手県下閉伊郡山田町飯岡2-1-60
TEL:0193-82-4618 FAX:0193-77-4619 HP:https://www.uchidate-dc.com/



スタッフの自主性を大切に 地域貢献にも取り組む 予防中心の歯科医院

神奈川県にある「ざま駅前歯科医院」は予防中心の地域密着型の歯科医院。スタッフが自主性を発揮し、生き生きと働く組織に育つまでの経緯を伺ってみた。

医療法人 豊貴会 院長 西村 一郎 先生
ざま駅前歯科医院



一般企業での勤務経験を経て 歯科医師を志す

「ざま駅前歯科医院」は、小田急線の座間駅前のロータリーを囲む2階建てビルの1階にある。

西村一郎院長が義姉から受け継ぐ形で院長に就任したのは2004年のこと。当時の歯科医院は、現在地の斜め向かい側にある建物の2階だった。

「チェアが2台、私と歯科衛生士、歯科助手兼受付の3名でのスタートでした。すぐに勤務医が1名増えましたが、当時はインプラントを手がける自費診療が中心の歯科医院でした」

それから4年ほど経った頃、予防中心の歯科医院に転換。患者の増加に対応するため、2018年、現在地に移転拡張した。

じつは西村院長は、学生時代から歯科医師を志したわけではない。慶應義塾大学経済学部を卒業後、就職したのは広告代理店だった。その後、歯科医師になることを決意。日本歯科大学歯学部へ入学した。

「学生時代に知り合った妻が歯科医師になったこと、自分が子どもの頃から歯で悩み、多くの歯科医院で治療を受けてきたこと、一般企業で働く経験をしたこと、親の病で事業を受け継ぐ話があり、広告代理店を退社して将来を見直す機会があったことなど、さまざまな体験が重なり、歯科医師を一生の仕事にしようと思ったのです」

とくに広告代理店で働いたことは、「歯科領域でのコ

ミュニケーションを変えていきたい」という夢を抱ききっかけになった。

当時、西村院長は自身の通院経験から、歯科医師の指示や説明に対し、患者はあまり質問もできずに受け身で聞くという一方通行のコミュニケーションが気になっていた。顧客のニーズを最も重視する広告代理店で働いていた西村院長にとって、患者の立場は顧客と同じ。歯科医師が患者の話に十分に、耳を傾け、対話するコミュニケーションのほうがよりよい関係を築けると考えたのだ。そして、患者との理想的な関係づくりに、自分の人生経験が活かせるとも感じた。

「患者さんに喜んでもらえる医療を提供したいという思いが歯科医師になる動機でしたから、少しでも早く現場で役立つ技術と経験を身につけたいと、歯科大学では熱心に勉強しました。卒業後、波多野歯科医院に勤務し、さらに東北大学歯学部大学院でも研究を続けたのも、その気持ちがあったからです」

院長に就任直後は インプラントの自費診療が中心

何事にも意欲的に取り組む西村院長は、研究者としての将来も囁望されたが、2004年、開業医としての一歩を踏み出した。しかし、前述のように当時は自費診療が中心だった。インプラントの専門医として研鑽を積んできたことと、勤務医時代の経験から、自身



半個室のユニットが並び診療室。奥の壁面すべてが収納棚になっており、在庫管理のため備品が棚ごとに整理されている



下部が曇りガラスの仕切りでプライバシーを守る



マイクロスコープを備えたユニット

の歯科医院も自費診療中心のスタイルが合っていると考えたからだ。

「でも、次第に迷いが生じるようになりました。住宅街が広がる座間市の地域性を考えると、果たしてインプラント中心の歯科医院でよいのか、と考えるようになったのです。開業医として初めて経験することも山積みで、スタッフとの関係に悩んだり、事務作業の煩雑さや勉強時間を削られるストレスも重なり、つらい日々でした」

西村院長は解決策を求め、悪戦苦闘した。往復3時間の通勤時間に読んだビジネス書は相当な数になった。経営セミナーにも数多く参加した。歯科医院を手放し、他の場所で一から出直したほうがよいのではないかと、思い詰めたこともあった。

「そんなとき、あるコンサルタントの方から、座間市に開業したのも縁があつてのことなのだから、今の場所で

続けたほうが良いとアドバイスされたのです。その言葉にハッとしました。患者さんに寄り添い、喜ばれる医療を提供したいという、歯科医師を志したときの思いが蘇ったのです。自分の人生にとって大切なものは何かを見直し、原点に立ち返った瞬間でした」

それからの西村院長の行動は素早かった。地域の歯科環境を向上させ、スタッフが働きやすい歯科医院を目指すには、予防歯科への転換が必須と気づいたからだ。そして、迷うことなく山形県酒田市にある日吉歯科診療所の熊谷崇理事長の門を叩いた。

「歯科医師の妻も同じ気持ちでしたし、ようやく自分の進む道がはっきりしたと感じました。それからは、予防歯科の技術と知識を学ぶため、妻やスタッフと一緒に熊谷先生のセミナーに参加したり、日吉歯科診療所に足繁く通いました。指導は厳しかったのですが、充実した日々でした」



ユニットの対面にはカウンセリングルームが3部屋並ぶ



窓に面したカウンセリングルーム



拡大鏡を使っでのメンテナンス



チーム医療で症例を検討



マイクロスコープを使っでの治療風景

予防歯科への転換が 歯科医院を大きく改革

「ざま駅前歯科医院」が予防歯科に転換するにあたり、西村院長がハードルの一つと考えたのは、口腔内のリスク評価をするために欠かせない唾液検査だった。予防の基礎となるメディカルトリートメントモデルを行うには、唾液検査に費用がかかることを患者に納得してもらう必要がある。

「インプラント中心だった歯科医院が予防歯科に変わることは、180度の転換です。不安もありましたが、実際に始めてみると、予想以上に患者さんが受け入れてくださいました」

予防歯科への転換は、「ざま駅前歯科医院」にさまざま

なメリットをもたらした。一つは、通院に熱心な患者が増えたこと。もう一つは、スタッフの意識が変わったことだ。とくに歯科衛生士のモチベーションが高まり、意欲的に仕事に取り組むようになった。「もっとよい医療を患者さんに提供したい」と自発的に院内改革のアイデアを出すようになった。

「口腔写真を撮影する手順やレントゲン撮影時のホルダーの位置づけの徹底、検査結果を用いた患者さんへの説明指導、スケーリング&ルートプレーニング技術の向上など、私もスタッフも学ばなければならなかったことがたくさんありました。そのため、院内教育の時間を大幅に増やしましたが、スタッフは熱心に学んでくれました。その姿を見たとき、方向転換は間違っていなかったと自信を持ちましたし、私自身のやりがいも増えました」



スタッフが考えた器具を細かく区分したパススルーの滅菌保管棚を設置



滅菌・消毒エリア



別棟にある広々とした歯科技工室



歯科技工の機器を設置

安心・安全な医療環境と 労働環境を重視した移転拡張

現在、「ざま駅前歯科医院」の1日の予約数は100名前後。予防の患者数は、治療の2倍になる。スタッフも増え、西村院長と常勤・非常勤を含め、歯科医師は9名、歯科衛生士が10名おり、歯科助手と受付担当、歯科技工士も含めると、約30名の大所帯だ。

2018年に移転拡張したのは、患者数の増加に対応し、スタッフの職場環境を改善するためだった。

「場所が決まってから移転するまで1年かけて、じっくり取り組みました。無理なく移転したかったからです。その間、スタッフはもちろん、ビルの所有者である小田急電鉄や歯科医院の設計会社、金融機関などと十分に話し合うことができました。引っ越しのための休診は1週間程度でしたし、質の高い移転ができたと思います」

移転先で最も重視したのは、患者が安心できる医療環境の構築だった。そのために最優先したのが、消毒・滅菌環境の充実だ。

「移転前から1年かけて院内で勉強し、どのような消

毒・滅菌環境が自分たちの歯科医院に最適かを探りました。その結果、ガラス張りの滅菌・消毒室を診療室の中央に配置することになりました。スタッフが考え抜いて作った滅菌・消毒室を私は誇らしく思っています」

もう一つ力を入れたのは、コミュニケーション環境の強化だ。院内には、スタッフと患者の間、スタッフ同士などさまざまなコミュニケーションがあるが、どれも落ち着いて話せる「場」が必要になる。そこで、カウンセリングルームとスタッフルームを充実させた。

「スタッフルームは歯科医院とは別のビルのワンフロアに作りました。スタッフルームの隣には歯科技工室もあります。どちらも面積を広く取り、設備を充実させました。スタッフが快適に働ける環境が整ったと思っています」

それらの部屋で目をひくのは、デジタル機器が充実していることだ。診療室だけでなく、歯科技工室にも最新の機器が設置され、クリーンな労働環境であることがよくわかる。

「もう一つの自慢は、診療室の壁全面を使った収納棚です。薬品や消耗品など、すべての医療用品の在庫を収納しています。じつは移転前、患者さんとスタッフが増え



訪問診療の専用車



別棟には、会議室や食事・休憩もできるスタッフルームがある

たことで生まれた悩みが、在庫管理でした。あちこちに在庫が点在する状況だったのです」

西村院長はデジタルツールを使った在庫管理を提案したが、スタッフから思わぬ反対を受けた。在庫管理ソフトは便利だが、担当スタッフだけに負担をかけることになりかねない。そうではなく、スタッフ全員が注意深く在庫に関心を持つシステムが自分たちの歯科医院には合っている、というのが、反対の理由だった。「どんな種類の医療用品がどれくらい在庫として院内にあるのかを、スタッフは時間をかけて調べ上げました。それをもとに医療用品ごとに収納する棚を決め、扉を開けて棚を見れば一目で在庫がわかるようにしました。アナログな方法ですが、誰にでもわかりますし、コストもかかりません。整理整頓の意識も高まります。スタッフたちのアイデアと解決力に驚きました」

西村院長はインタビューの間、何度も「うちのスタッフたちは本当にすごい」とパワフルな働きぶりをうれしそうに語った。新型コロナウイルス感染症が流行り始めた頃、「絶対にうちの歯科医院は閉めません」と勤務し続けてくれたことも、その一つだ。

歯科医院前の中庭を使い、近隣のファミリーが集えるお祭りのイベントもスタッフたちの発案で開催された。「ざま駅前歯科医院」では、誕生日から子どもの歯を守

るため、「マイナスゼロ歳からの歯科予防」に力を入れている。ファミリー層にもっと予防歯科に目を向けてもらいたいと、親子が楽しめるイベントを開催したのだ。会場には、西村院長が来場者の疑問に答える歯科の質問ブースもあった。

「啓発用の紙芝居を作ったり、歯科衛生士として学んできたことを活かせるのも、スタッフたちにはうれしいようです。私の役目は、スタッフの夢とチャレンジ精神を支え、人間的な成長をサポートすること。それができる喜びを日々、感じています。これからもスタッフ全員が心から仕事が楽しいと感じる歯科医院でありたいと思っています」



西村一郎院長（中列左から3番目）と、スタッフのみなさん

PROFILE

西村 一郎 先生

●1984年 慶應義塾大学経済学部卒業。広告代理店勤務 ●1998年 日本歯科大学歯学部卒業。医療法人慈皓会波多野歯科医院勤務 ●1999年 東北大学歯学部大学院入学 ●2001年 波多野歯科医院カタクラパーク診療所所長 ●2003年 東北大学歯学部大学院卒業。歯学博士取得 ●2004年 ざま駅前歯科医院院長就任 ●2010年 日本歯科大学非常勤講師 ●2011年 ニューヨーク大学短期留学 ●歯科医師臨床研修指導歯科医 ●国際口腔インプラント学会 (ICOI) フェロウシップ修了 (認定医)

医療法人 豊貴会
ざま駅前歯科医院

住所：神奈川県座間市入谷東3-60-2 小田急マルシェ座間1F
TEL:046-266-6868 HP:https://www.z-shika.com/



シロクマのキャラクターが目をひく外観



カウンター席と長椅子がある待合室

継承した歯科医院を 新規開業でリスタート、 デンタルIQを向上させる 治療に取り組む

「Youすまいる歯科」は北海道の観光地としても知られる美瑛町にある。父の歯科医院を新規開業の形で受け継ぎ、誠実な治療を追求する思いを伺ってみた。

Youすまいる歯科 院長 小林 祐二 先生



アットホームな雰囲気 の歯科医院を新規開業

「Youすまいる歯科」は、町立病院や町役場が近く、患者が通いやすい上川郡美瑛町の住宅街にある。

小林祐二院長が父の小林利夫先生から歯科医院を引き継いだのは2014年。そのまま継承するのではなく、いったん閉院し、建物も名前も新しくしてのリスタートだった。「2代目ながら新規開業の形をとったのは、私と父では治療方法が違うことを目に見える形で患者さんに伝えなかったからです。私も父も患者さんのために、よりよい治療をしたいという思いは同じです。ただ、教育を受けた時代が異なることもあり、目指すゴールは同じでも、治療のプロセスが違います。新規開業にすることで、その違いがわかりやすくなると考えたのです」

新しい歯科医院は、ファミリー層を意識し、アットホームな雰囲気に作られている。施工会社と相談しながら、木のぬくもりを感じるカフェのような居心地のよい空間を作り上げた。

「待合室に窓に面するカウンターを作ったのは、自分の時間を大切にしたいと考える患者さんもいるのではないかと考えたからです。カウンター席では読書をする患者さんがいたり、宿題をするお子さんがいたり、思い思いに過ご

されているようです」

診療室もチェア3台のうち、2台はパーティションで切った半個室だが、1台は個室にした。これもプライバシーを重視する患者への対応を考えてのことだ。

歯科医院のキャラクターをシロクマにしたのは、小林院長のイメージから。歯科医院名には、「患者さん一人ひとりに笑顔を咲かせるお手伝いをしたい」という意味を込めたという。

「父は今もずっと診てきた患者さんの治療を続けています。完全に患者さんの担当を分けていますし、ふだんは治療について話すことはありませんが、ダブルチェックが必要など、父に相談することもあります。受け継ぐにあたって、父が私にすべて任せると言ってくれたことはありがたかったです」

将来に悩みながら 歯科医師としての研鑽を積む

父が歯科医師、母が歯科衛生士という家庭で育った小林院長は、幼い頃から将来は歯科医師になることを当然のように考えていた。しかし、歯学部に入學し、実際に勉強を始めてみると、迷いを感じるようになった。

「自他共に認めるくらい不器用だったからです。臨床実習



オペ室も兼ねた個室



半個室の診療室



個室タイプの診療室

が始まると悩みはさらに深くなり、自分は歯科医師に向いていないのではないか、大学で研究の道を進んだほうがいいのか、とも考えるようになりました」

だが、小林院長は北海道に戻った。父からの「北海道に戻って欲しい」という言葉が胸に響いたからだ。そして、父の同級生がいる縁もあり、札幌医科大学の歯科口腔外科で臨床研修をすることになった。これが転機になった。「北海道に戻ることを決めたとき、臨床をやっていくと気持ちを持ち替えました。もう一つ、大きかったのが大学病院で研修をしたことです。超高齢社会が進むことを考えると、開業医になったとき、高齢の患者さんを多く診ることになります。大学病院の歯科は医科と連携しているので、全身の既往症を持つ患者さんも診ることになります。歯科医師は持病や処方薬のことも知らなければなりません。大学病院での研修を通じて、口のなかの健康が全身の健康につながることに気づかされました」

大学病院で全身既往を持つ患者への対応を学んだことは、よい経験になり、開業医になってからも多々、役立っているという。

そして1年間の臨床研修が終わろうとする頃、もう一つの転機が訪れる。父が倒れたのだ。2週間ほどの入院で済んだが、歯科医院を継ぐ時期が早まった。

「とはいえ、大学病院は口腔外科でしたし、一般歯科の診療経験がまだまだ足りません。札幌市から美瑛町に通うのは難しいので、旭川市の歯科医院に勤務しながら、休日に父を手伝うことになりました」

小林院長は経験を積むため、必死で技術を磨いた。このとき取り入れたのが、動画で施術のプロセスを撮影することだ。口腔内の治療の様子だけでなく、自分の作業姿勢も撮影した。動画を見直すことで、思い通りに治療できなかった部分の確認ができ、自分の動作の癖に気がつくこともできた。不器用と自覚しているからこそ、さまざまな



収納機能も充実している準備エリア



CTを備えたレントゲン室

工夫を考えながら、技術の向上を目指したのだ。動画を
使った確認は、今も時間を見つけて続けているという。

丁寧な診療を通じて 患者のデンタルIQ向上を目指す

「Youすまいる歯科」の新患は開業時から順調に増え、
1日50名の患者を診る日が続いた。同時に小林院長は
休日になるとさまざまな勉強会に参加し、研鑽を続けた。
「とくに勉強になったのは、北九州で開業する上田秀朗
先生のKIDSコースを受講したときです。講義の内容は
もちろんですが、上田先生から『丁寧に仕事をしなさい』
とご指導いただいたことは大きかったです。それまでの私
は早く治療しなければという意識が強かったのです。そ
れからは、つねに丁寧に仕事をすることを心がけるよう
になりました」

そして開業から5年ほど経った頃、予約の取り方も見直
すようになった。小林院長が望むのは、患者の将来を考え
た治療だ。主訴の治療だけに追われる日々では、治療計
画もなく取り組むことになってしまう。一人ひとりの患者と
向き合い、全体的に現状を調べ、将来を考えた計画に沿っ
て治療をしていきたい。そう考えた小林院長は、1日に診る
患者を30名に減らすことにした。
「予約数を見直したのは、私が目指す歯科治療を理解し
てくれる患者さんが少しずつ増えてきた時期でもありまし
た。『こんな田舎でもこんな治療が受けられるなんて』と、

喜んでもらえたときは、やってきてよかったと思いました。
田舎だからよい治療ができないことはありません。どんな
場所でもよい歯科治療が受けられることを多くの患者さ
んに知ってもらいたい。今はまだ、その過渡期です。患者さ
んに理解してもらおう努力がもっと必要だと感じています」

歯科の本質は、しっかりと噛める歯を守り続けること。そ
の基本に忠実でありたいと考える小林院長は、スタッフ教
育でも知識と技術の研鑽を第一に考えている。スタッフが
希望するセミナーには快く送り出し、ときには外部から講
師を招いての院内勉強会も行っている。

ホームページを設けていないのも、「Youすまいる歯科」
の診療方針をよく理解する患者からの口コミで、患者の
裾野を広げたいと考えているからだ。
「うちの歯科医院を通して、患者さんのデンタルIQを高める
のが目標の一つです。患者さんには受け身ではなく、自分
の歯は自分で守るという自主性を持ってもらいたいのです。
歯を大切にしたいと思って来院される患者さんを1人でも
増やせる歯科医院に成長していきたいと思っています」



小林祐二院長とお父様の利夫先生（前列中央）と、スタッフのみなさん

PROFILE

小林 祐二 先生

●2008年 愛知学院大学歯学部卒業。札幌医科大学歯科口腔外科に臨床研修のため入局 ●2009年 旭川市で勤務医をしながら、休日は父の歯科医院を手伝う ●2014年 Youすまいる歯科開業 ●日本歯周病学会 ●日本臨床歯科CAD/CAM学会

Youすまいる 歯科

住所：北海道 上川郡 美瑛町 本町4-4-5 TEL：0166-92-0045



木を多用したシックな雰囲気の待合スペース



玄関ドアの正面にある受付

米国留学を機に 歯内療法専門医院を オープン

銀座にある「石井歯科医院」は歯内療法専門の歯科医院。
米国留学を機に専門医になった歩みと現在を伺ってみた。

石井歯科医院 院長 石井 宏 先生



米国留学で出会った 歯内療法

歯内療法を専門にする「石井歯科医院」は東京・銀座のオフィスビルの地下にある。来院しているのは、一般歯科から紹介された患者だ。

2007年の開業時は新橋にあり、石井宏院長は15坪の診療室でチェア1台から始めた。2012年、手狭になり、近隣に移転。2018年に現在地に移った。

じつは石井院長は神奈川歯科大学を卒業後、一度は東京都板橋区赤塚で一般歯科の医院を開業した。今から25年前のことだ。

そして、36歳のときに米国のペンシルベニア大学大学院に2年間、留学。このとき歯内療法学科で学んだことが、帰国後、これを専門とする歯科医院の開業につながった。「留学したきっかけは、学生の頃から歯科先進国である米国と日本の教育システムの違いに興味を持っていたことです。留学経験がある先生方に話を聞くなかで、明らかに日本と違うと感じ、自分でも現地で学んでみたいと思うようになったのです」

石井院長が望んだのは、ネイティブの学生と同じ教育を受けることだった。日本人が短期留学できる大学は多いが、年単位で受け入れる大学は限られている。

「本格的に留学準備を始めて入学するまで、3年はかかりました。一番の難関は、非英語圏の者が入学するために必須のTOEFLで、出願に必要な点数を取ることでした。勉強のため、週3回は塾に通いました」

診療と受験勉強というハードな日々を経て、ペンシルベニア大学大学院歯内療法学科とボストン大学大学院の

歯周病科に合格。歯科医院を勤務医に任せての留学になるため、ボストン大学より教育期間が1年短いペンシルベニア大学を選んだ。

「留学前から歯内療法を勉強すると考えていたわけではありません。進学先を選んだ結果、出会った専門分野でした。ですが、入学してみるとカリキュラムが非常に合理的で、ステップアップしていけば、確実に専門医の最低ラインまでは到達できるシステムになっていました」

ペンシルベニア大学は、臨床実習と座学の割合がおおよそ8対2。患者を治療しながら学ぶシステムだ。カリキュラムに沿って臨床で技術を学び、テストを受けるというステップを繰り返していく。石井院長は2年生に進級する頃には、日本で歯内療法を専門とする歯科医院の開業を決めていた。

「留学前は、一般歯科のなかで、学んできた歯内療法を活かすことになると考えていました。保険点数の関係から、専門で診療するのは難しいと思っていたのです。しかし、留学を通して、日本で行われている歯内療法とは結果が大きく違うこと、病気が治る確率がかなり上がることがわかり、自費診療の専門医としてやっていける自信がついたのです」

英語に苦労しながらも、石井院長は「歯学部学生最優秀指導賞」「歯科医師卒後研修優秀指導賞」を受賞して卒業。帰国後は歯内療法の専門医として、新たなスタートを切ることになった。

歯内療法で最も重視する 無菌的環境での治療

現在の「石井歯科医院」は40坪の広さ。木を多用したシッ



石井院長専用の診療室



第2診療室



第2・第3診療室は主に勤務医が使用

クなデザインが印象的だ。3台のチェアはすべて個室になっている。石井院長に、専門医院ならではの設備を伺うと、「それぞれの個室にはマイクロスコープとデンタルレントゲン、レントゲン室にコーンビームCTを設置しています」と教えてくれた。

来院する患者は40～60代が多い。関東圏が中心だが、北海道や九州、沖縄から訪れる患者もいる。

他の歯科医院からの紹介状がないと受診できないが、ホームページを見て問い合わせをしてくる患者も少なくない。「その場合は、先にかかりつけ医と相談することをお願いしています。かかりつけ医がいない場合は、一般歯科を何軒か紹介し、まずはそこに行ってもらうように話すこともあります。ただ、セカンドオピニオンを希望する場合は、紹介状なしで受け入れることもあります」

現在、「石井歯科医院」には石井院長に加え、2名の勤務医がいる。1人の歯科医師が診療できる1日の患者数は、午前と午後それぞれ3時間の診療時間内で4名が限

界だ。初診時は45～60分かけて診査・診断とカウンセリングを、2回目以降は1回に90分かけて治療を行うからだ。一方で患者は、1、2回の通院で済む。

「専門医として重視することは、治療する歯をいかに無菌的状态で処置できるかということです。日本でも教科書や授業で学びますが、実際に守られているケースは少ない。私も留学前は、そこまで厳しくなくても大丈夫なのだろうと思っていました。しかし、米国では厳密に守られています。結果も日米で明らかに違う。それを目の当たりにしたことは大きかったです」

歯内療法の場合、無菌的環境は治療対象の1歯単位でよい。ラバーダムの使用や器具のディスポーザブルなどを徹底することになる。

「開業時から手技の面は変わっていません。変わったことと言えば、根管形成と根管充填の材料がよくなったことでしょう。より保存的な形成ができるようになったり、根管充填がより簡単になったとは言えると思います」



移転拡張を機に新たに作られたセミナールーム。
各診療室の治療シーンがモニター上に映し出される



コーンビームCTを備えたレントゲン室

後進の指導に力を入れ 専門医の重要性を広める

診療と並行し、石井院長が力を入れているのは、後進の指導だ。米国と同等の歯内療法を手がけることのできる専門医を1人でも増やしたいと考えている。また、結婚や出産でライフステージが変わりやすい女性の歯科医師には、単発での治療が可能で、キャリアアップも継続しやすい歯内療法の専門医が向いているとも話す。

石井院長が最も情熱を注いでいる教育プログラムは、スタディグループの「PESC.J」だ。2009年に立ち上げ、現在は14期生。1期の受講生8名が1年間、学ぶ。「勉強量が多いので、厳しいスタディグループと周知されているようです。月1回、土日に集まり、事前に出された課題の成果を発表するのですが、月の残りの20日間ほどは自分の歯科医院で課題の実習をする状態になります。つまり、ほぼフルタイムのコースです」

もう一つの教育プログラムは、「石井歯内療法研修会」だ。年3回ほど行われる2日間のコースで受講生は約40名。さらに、藤本順平先生が主宰する「藤本研修会」で2カ月に1回、1年間のコースで講師も務めている。この2つの研修会を経て、より深く学びたいと「PESC.J」を受講する歯科医師も少なくない。

石井院長が受講生に望むのは、正しいステップで学ぶと、受講前には知り得ないレベルの根管治療の結果が出せることを理解して欲しいということ。そして、身につけた

技術と知識を活かし、診療している地域の患者や他の歯科医院にも理解を広めて欲しいということだ。

その考えの背景には、「石井歯科医院」の患者の7割が、再治療で訪れていることがある。一般歯科で根管治療を受けたものの、結果が好ましくないため、石井院長を頼るケースが非常に多い。初めての根管治療のときからの確かな治療を受けることができれば、失敗率が減り、歯を長く持たせられる。患者にとって最適な治療プロセスを、日本のどの地域に住んでいても選択できる医療環境にしたいという思いがある。

「一般の方がインターネットを通じて医療情報を得やすくなっているからでしょう。患者さんの歯に対する知識量が増え、歯内療法の認知度や期待感が増していると感じています。患者さんからの要望に後押しされ、専門医への紹介を必要とするケースはこれからさらに増えていくでしょう。米国のような歯内療法の専門医制度が必要なのではないか、とも考えているところです」



石井宏院長(前列中央)と、スタッフのみなさん

PROFILE

石井 宏 先生

●1993年 神奈川歯科大学卒業 ●1997年 一般歯科を開業 ●2004年 ペンシルベニア大学大学院歯内療法学科入学 ●2006年 ペンシルベニア大学大学院歯内療法学科卒業 ●2007年 石井歯科医院開業 ●2018年 現在地に移転拡張 ●ペンシルベニア大学非常勤講師

石井歯科医院

住所:東京都中央区銀座7-13-5 NREG銀座ビルB1階
TEL:03-3543-8757 HP:<http://www.tokyo-endodontist.com/>

歯内療法専門医が日常的に 遭遇する比較的難易度の高い症例

石井歯科医院 院長 石井 宏 先生



症例 I

右上2番

歯内歯が失活し大きな根尖病変が発症し抜歯を宣告された症例

女性 初診時:23歳(2016年 2・24) 現在30歳



右上側切歯に
歯内歯と
大きな根尖病変が
みられる

主訴 たまに腫れぼったい。抜歯を勧められたが保存が可能か診て欲しい。

診断名 ● 歯髄：歯髄壊死 ● 根尖歯周組織：症状のない根尖性歯周炎

治療計画 根管治療と予後不良時の外科的歯内療法



No.01
舌側に窩が2
つみられた



No.02
歯冠の変色は
顕著でないが
ブルーコント
ロールはよく
ない



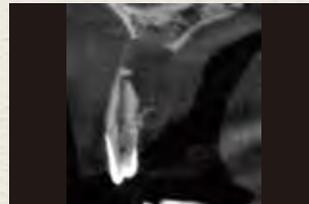
No.03
CBCTの3D画
像より、根尖部
の骨欠損が著
しいことがわ
かる



No.04
冠状断面:歯牙
の歯冠側1/2
に不規則な石
灰化物がみら
れる。根尖部は
開放している



No.05
横断面:根管内
部に輪状の石
灰化像がみら
れる



No.06
矢状断面:根尖
部の大きな骨
欠損と根尖部
の開放状態が
観察できる



No.07
4・4 BMIまで
ラバーダム防
湿後、30%過酸
化水素と5%の
ヨード溶液にて
消毒を行った



No.08
舌側の2つの
窩より切削を
始めた



No.09
石灰化物がみ
られる



No.10
石灰化物周囲
と根管壁との
接合部を追求
する



No.11
石灰化物の除
去後



No.12
除去された石
灰化物



No.13
4・21 RCF
MTAセメント
にて根管充填
を行った



No.14
10・16 経過
根管充填後
6カ月



No.15
2017年 4・12
根管充填後1
年



No.16
2022年 10・4
経過
根管充填後6年
半:外科的介入も
必要がなく順調
に経過している

臨床的意義

抜歯+インプラントの治療計画が間違っているわけではないと思うが、失われていた骨欠損量を鑑みると審美的なインプラントを行うためには相当な技術が必要なのではなかったかと想像する。現時点で骨も回復し、もし今後インプラントになったとしてもその難易度は当時と比較していくらかは低下することができたのではないかと推察する。

我々歯内療法専門医は、日常において歯内療法領域に限定した診療を行っている。セカンドオピニオン以外のすべての患者にはかかりつけ医が決定していて、患者とかかりつけ医双方にとって利益になるような診療を心がけている。そのような環境において、当然ながら紹介されてくる症例の多くは比較的難易度が高く、場合によっては抜歯を宣告されたものの、患者がどうしても諦めら

れずに一度診察して欲しいと紹介されてくる症例もあれば、一方で質の高い歯内療法を求めてinitial treatmentのように比較的難易度の低い症例を依頼されることも少なくない。今回紹介する症例においては、そのなかでも当院においては難易度的には中程度からやや難易度の高めで、日常臨床では最も多い層(難易度的に)の2症例を紹介させていただく。

症例Ⅱ

右下6番

遠心根に外部吸収とそれに伴う穿孔が疑われた症例

女性 初診時:11歳(2014年 6・23) 現在20歳

主訴 腫れていて抜歯と診断された。

診断名 ● 歯髄：既根管治療歯 ● 根尖歯周組織：症状のある根尖性歯周炎(Sinus Tractあり)

治療計画 根管治療と予後不良時の外科的歯内療法



根尖病変、遠心根中央部の歯根吸収がみられる



頬側にはSinus Tractが存在した



No.01
CBCT 3D画像：分岐部と遠心根周囲に骨欠損がみられる



No.02
冠状断面：根尖病変と遠心根歯頸部寄りに吸収像がみられる



No.03
横断面：頬側遠心根に吸収像と穿孔を疑わせる透過像がみられる



No.04
矢状断面：根尖部に透過像と吸収像がみられる



No.05
7・31 穿孔修理 BMI
近心壁と遠心頬側にCR充填がみられた



No.06
充填物を除去すると出血・排膿がみられた



No.07
肉芽を除去し止血



No.08
穿孔部位の郭清



No.09
MTAセメントにて穿孔部の封鎖



No.10
頬側遠心根もMTAセメントにて同時に根管充填



No.11
8・19 RCF それ以外の根管を別日に充填した



No.12
築造時のサンドブラスト処理後



No.13
かかりつけ医による暫間冠の装着



No.14
2022年 10・12 経過
術後8年経過後：経過良好である

臨床的意義

11歳で右下6番を失いかけたわけであるが、現在20歳であり、今後どの程度当該歯が維持できるかわからないが、少なくともインプラントが可能な年齢まで天然歯を保存できた意義は大きい。

ササキホームページでは皆様のお役に立つ情報を公開中です。

ササキ株式会社
ホームページ
SASAKI CO.,LTD.



下記から、アクセスください。



C&C
ケア&コミュニケーション
CARE & COMMUNICATION



※バックナンバー掲載中



下記から、アクセスください。



歯科医院
新規開業・改装サポート
SASAKI STARTUP SUPPORT



SASAKI STARTUP SUPPORT

下記から、アクセスください。



 **SASAKI**
<https://www.sasaki-kk.co.jp>

SASAKI Care & Communication Vol.59 December 2022 お問い合わせ・ご意見:「C&C」事務局 細谷俊寛
FAX 0120-566-052 <https://www.sasaki-kk.co.jp>

発行:ササキ株式会社 東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F

●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。